引き出すということ

令和元年6月1日(土)、2日(日)の2日間、第69回道高P連【胆振・日高大会】(苫小牧市)に前PTA会長松葉師正さんと参加してきました。1日目はグランドホテルニュー王子にて開会式・表彰式、講演会、教育懇談会、2日目は苫小牧東高校にて分科会という日程でした。

松葉さんは、道高P連から、PTA活動の功績に対する感謝状を贈呈されました。これまでの3年間、本校PTA活動のためにご尽力いただき、心より感謝申し上げます。

さて、ここで、元日本ハムファイターズ内野守備走塁コーチ兼作戦担当の白井一幸氏を講師に、「可能性を引き出すコミュニケーション」と題した講演会の内容を紹介します。

指導者側の視点から見た「だめな3つの頑張り」として、

- ① 結果に「怒る」→怒りと脅しがセットに。気合が前面に。熱心な指導者と評価されがちだが、選手はやる気になるのか、自信がつくのか。反発しか生まれないのでは。
- ② 原因を「教える」→選手も分かりきっていることを、指導者から繰り返し教えられる。理論的な指導者だと評価されがちだが、選手は話を聞かなくなる、原因を自分で考えなくなる。
- ③ 練習を「やらせる」→頑張っている指導者と評価されがちだが、ペナルティ型の練習は選手のやる気をそぐ。

この3点を軸に、次のように講話が展開しました。

- ・ 必要なことは選手の成長、そこに焦点を当てる。指導者の自己満足ではなく。
- ・ ハイ、イエエのクローズドクエスションはしない。このクエスションは、指導者にとっては気持ち良いが…。
- ・ オープンクエスションで。分かりやすく教えるのではなく、選手が自ら考えるように仕向ける。「質問」をすることで、選手は「話す」、指導者は話を「聞く」。このことで選手は意識を高め、集中して「考える」ようになる。
- ・ コミュニケーションの第1歩は「聞く」こと。心の中を聞く。しかし、「聞く」ことは難しいのも事実。選手も話しやすいように、顔を見たり、目を見たり、指導者自身の手(別業務)を止める、笑顔、うなずき、メモを取るなどの工夫が必要。
- ・ 選手自ら「練習したい」と思わせる、言えるように仕向ける。選手から「1時間ノックをお願いします。」と。この一言が選手自身の頑張り・意欲につながる。自ら起こした行動がその後のエネルギーになる。
- ・ 「学び」と「行動」が両輪となって、選手が前進(成長)する。「学び」を「行動」に移す。

白井氏の実体験に裏付けられた内容を、絶妙な話術で、千名を超える参加者も惹き込みながらの、あっという間の90分でした。振り返ってみるに、私自身もそうですが、学校教育の現場はどうであったかなど。英語の「教育」educationの語源はラテン語のeducatio(引き出す)からきていますが、改めて、生徒たちの本来持っている能力を引き出すという教育の役割を考えさせられました。

白井氏の、選手育成モットー「可能性を開く鍵は、意識の持ち方と行動力」、勉強になりました。この「学び」を「行動」に。